

01

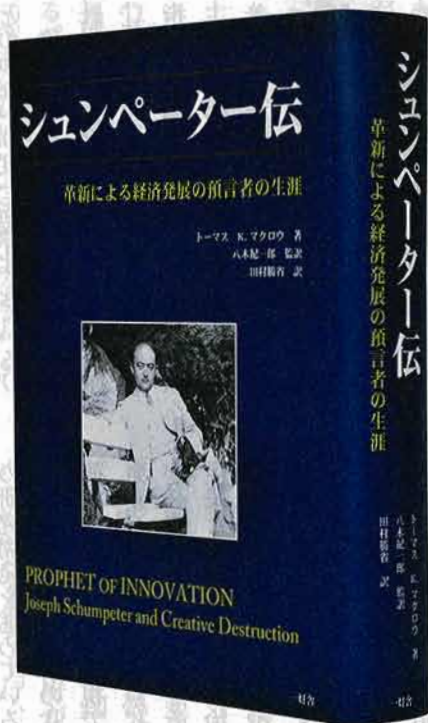
シュンペーター伝 革新による経済発展の預言者の生涯

トーマス K. マクロウ 著
八木紀一郎 監訳 / 田村勝省 訳

一灯舎
3990円 / 609ページ

profile

Thomas K. McCraw
米ハーバード大学経営学大学院のストラウス記念・企業史名誉教授。米ハーバード・ビジネススクール教授を務めた。本書でハイグリー経営史最優秀出版賞、国際シュンペーター学会賞ほかを受賞。ピューリッツァー賞(歴史部門)の受賞歴もある。



波乱万丈の人生を送った
巨人の実像

評者
北海道大学大学院准教授
橋本努

20世紀を代表する三大経済学者の一人、ジョセフ・A・シュンペーターの決定的な伝記が現れた。

資本主義の原動力として「創造的破壊」を称揚したシュンペーターは、毎日、自分を厳しく評価していた。日記では0点から1点満点まで、自己の達成度を記録したという。他方で彼は、一流の演技力でもって会話や講演を楽しんだ。財務大臣としての横顔もある。だが財産は市況の暴落で失ってしまった。それでも派手な生活を好み、数々の女性たちに囲まれた。栄光と挫折、愛と孤独という、波乱万丈の人生を送った巨人の実像が、いま鮮やかによみがえる。おそらくエコノミストやビジネスマンに必要な人生訓は、この一冊に詰まっているのではない。それほどまでに感銘を受ける。シュンペーター本人、あるいは親しかった人たちが残した日記や手紙から、本書はさまざまな名言を抜粋する。人生を深く洞察するための、言葉の宝庫である。

シュンペーターは悲劇的英雄

シュンペーター伝

目次

第I部 恐るべき子供(一八八三—一九二六)：革新と経済学

シュンペーターとその業績/故郷を離れる/性格の形成/経済学を学ぶ/徘徊/出世への歩み/戦争と政治/グラン・リフィウート/アニー/悲嘆

第II部 成人期(一九二六—一九三九)：資本主義と社会

シュンペーターは何を学んだか?/知性の新たな目標/政策と企業家精神/ボン大学とハーバード大学の往来/ハーバード大学/苦悩と慰め

第III部 賢人(一九三九—一九五〇)：革新、資本主義、歴史

どのように、なぜ歴史と取り組んだのか/景気循環、企業史/ヨーロッパからの手紙/ハーバード大学を去る?/不本意ながら/エリザベスの勇気ある信念/疎外/資本主義・社会主義・民主主義/戦争と困惑/内省/名誉と危機/混合経済に向けて/経済分析の歴史/不確定性の原則/結びの句/遺産

であった。43歳にして母と妻とその新生児を同時に失い、絶望の淵に立たされた。「私はこれからの歲月のことを思うと身震いし、私はお前(妻)のいない人生に戦慄する」と彼は記している。「すべてが私の働く能力次第である。そうであれば、仮に私の私生活は終わったとしても、動力源は稼働し続けるだろう」。

新資料に基づいて書かれた本書は、ハイグリー経営史最優秀出版賞、シュベングラール経済学史賞、国際シュンペーター学会賞、等々の賞を受賞。前作でピューリッツァー賞を授与されたハーバード大学教授の手による、渾身の作である。

シュンペーターは逆説家であり、皮肉屋ともいわれた。たとえば彼は、創造的破壊の精神を鼓舞する一方で、実際には「保守主義」の立場をとっていた。

創造的破壊は、大切な人間的価値を低下させることをよく知っていた。彼は、古きよき旧世界の芸術的達成を維持するために、民衆の革新勢力を抑えるべきだとも考えた。

そんな保守主義者のシュンペーターが、名著「資本主義・社会主義・民主主義」では、社会主義への移行を必然的であると主張したのは、人を驚かせようとする彼の習癖ゆえだったのであらうか。

弟子のポール・サミュエルソンは、師の性格に「大切にされてきた一人っ子に典型的」な不安定さを見抜いている。シュンペーターは、疎外された異邦人としての役割を演じていたのだ。だがたんなる道化師と呼ぶにはあまりに巨人すぎる。巨人は完璧な仕事の理念に突き動かされる。その執念に学びたい。